

Title	前野蘭化(岩崎克己著, 個人出版)
Sub Title	
Author	高橋, 碩一(Takahashi, Shinichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1939
Jtitle	史学 Vol.17, No.3 (1939. 4) ,p.180(520)- 181(521)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0181">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19390400-0181</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

らない。本書の價値はその完成を待つて益々大となるであらう。尙ほ著者にして本書の綱概を摘記し、右門心學小史ともいふべきものを編著せられたならば、一般人士に大いなる裨益を與へる事が出来ると思ふ。又本書再版の折もあらば、件名索引を今少しく詳細にせられん事を望む。

思はずも妄言を重ねた。著者の寛恕を請ふと共に、改めてその偉大な努力に満腔の敬意を表する次第である。(菊判本文一三六七頁、挿繪一九九圖、附録五葉、定價十三圓)(中井信彦)

### 北畠顯家卿

(中村孝也著)  
(全國奉贊會發行)

後醍醐天皇の建武御鴻業は、朝權の回復と肇國の大精神の顯現にありしも、中途禍亂相踵いで挫折し、遂に南狩中崩御せらる。

この間、幾多勤王忠臣烈士の父子兄弟相承けて殉節し、其の事蹟は燦然として青史へ一段の光彩を添えてゐる。就中、北畠顯家は弱冠ならずして詔を拜承して皇子義良親王を奉じ東北邊疆の鎮府となり、又質樸剛毅の奥羽健兒を率ゐて二度畿甸に轉戦力闘し國家經綸の大策を披瀝しつゝ、遂に泉州の野に陣歿す。昨年其の六百年に際會し、顯家と因縁殊に深き福島縣に於ては全國同志の贊同を得て、同年十月二十二日を期し顯家奉祀の縣下伊達郡別格官幣社靈山神社に於て建武鴻業奉贊祭・北畠顯家卿六百年祭・建武忠烈景仰祭を修し、其の記念として奉贊會より中村孝也博士に委嘱し本書を上梓せしものである。顯家の傳としては本書を以て嚆矢とし、博士の該博なる知識による論證と流麗なる行文とは、克

く顯家の誠忠を萬古に照映して餘す所がない。

本書は顯家を主とするも其間親房、顯信、守親等一家の忠烈の事蹟も諸所に散見し、殊に終の一章を割きて北畠顯信の事蹟を記述し、更に顯家文書等七十餘通を選びて北畠顯家卿文書集と題して附載し讀者に多大の便宜を與へてゐる。就中、延元三年五月十五日戦死に先つこと七日の上奏文は實に時弊を釐革し綱紀を振肅せんとする熱意よりして、敢て直言し乙夜の覽に供し奉りたるもので、顯家の國家經綸を伺ふる史料で、熟讀すべきものである。最後に著者は、かくの如く傑出せる顯家の人格の構成要素を分解して先天的には遺傳に基く天稟の秀拔と後天的には環境と修養とに由る異常なる鍛鍊とを指摘することが出来ると思へる。又顯信の事蹟につきては從來の所傳に、まゝ誤説あれば、他の其の傳の必要を述べられてゐるが、同書も亦博士の筆勞を煩すことを切望する。

余、本書讀了後、二十有餘年前、靈山神社に參拜して神徳を景仰し、又、昨春、福島宮城兩縣下に於ける各陸軍病院へ御慰問として御差遣の宮殿下に隨行して滿洲支那兩事變に奮戦、名譽ある戦傷を受けし數千の勇士に面接せしことを共に想起し、これ等勇士には其の昔北畠氏一家に隨ひ殉節せし勇士の熱血の通ふと思へば、自ら感激感謝の念に堪えぬ次第である。(十四、二、五、武田勝藏)

### 前野蘭化

(岩崎克己著)  
(個人出版)

洋學——近世後半に至つて漸く識者の認むる所となつた西洋近代思想學術——の研究は未だ未開拓であると言はれる。この事は洋學に含まれる所の諸學例へば醫學、天文學、兵學等の研究が未開拓であると云ふのではない。むしろそれらは一定の飽和状態をさえ感ぜしめるやうな精緻な研究に迄到達したものとさえあるのである。

しかもなほ洋學が一定の規定をすら受け得ぬと云ふのは一に洋學研究には非常に多方面の知識を必要とし、且つその史料が甚だ廣く分散してゐる爲と思はれる。又更に我々を苦しめるものは洋學の基礎となつた外國語が和蘭語と云ふ現在一般的でない言語を通じたものである點で、これこそは洋學研究の一障壁として我々の前に横はるものである。

本書は著者が語學專攻の學者である所から正にこの障壁を美事に突破されたもので自分は本書を以て洋學研究史上に一エポックを劃したものと推稱したのである。

自分は最近淺學にも拘らず洋學に關する一小著を公にする機會を有つて目下遲筆に鞭つてゐるが、これについて恩師幸田成友先生が自分に示されたのが本書であつた。自分は本書を手にして思はず先生の前をも憚らず感嘆の聲を擧げたのであつた。

こゝに書き出されてゐるのは一前野蘭化(良澤)の傳記ではない。著者は言ふ。

「この小篇は黎明期に於ける我が蘭學の一斷面を前野蘭化なる人物に託して描寫せんとしたものである。それは我が夏の日の夢に構想してゐる日本蘭學史の第一章、或ひはその序説と看做

して戴いても差支へない」

氏の研究、敘述の態度はあらゆる先人の研究を涉獵し蘭學研究の集大成を企圖せらるゝものゝ如くであり、しかもその尨大なる資料を十二分に消化、驅使せられてゐる。

先づ蘭學の意義より説き起して前野蘭化に至る蘭學史を構成されてゐるが中にも長崎に於ける通詞の蘭學についてその語學の根柢を分析された事は蘭學研究者の一宿題を解いたものとして、又今後の洋學研究に一の鍵を與へたものとして重要であり、從來の名家の説にして覆つたものとさえ見出される。

本論に入つては正に著者の卓越せる語學力によつてのみ獲らるべき燦然たる成果を収めて居られるが自分の冗文は最早これを紹介することを許されなくなつた。

終りに本書には前野良澤の未刊遺稿九種が附録として收められてゐることを喜び、この大著を犠牲的個人出版せられた著者の學界に對する貢獻の偉大なるを讃へて感謝の意を表する。(個人出版七〇一頁)(高橋嶺一)

### 日本國家思想

(肥後和男著  
弘文堂刊行)

これは此の度び發刊された教養文庫の一冊である。

我々は須臾も國家から離れることは出來ない。日本、ドイツ、イタリヤの力強き活動もすべて國家に立脚してゐる。世紀の祕密國家の門を開かなければ現代を理解することは出來ない。私は歴史學の立場から日本國家思想の時代的展開を試る。